

「見守り続ける永遠のエール」

私のピカイチの応援エピソードは、亡き母から日々受けていたエールです。

私は幼少期から、応援活動に数々参加してきました。

例えば、運動会の応援団、生徒会立候補者の選挙応援、大学時代は応援団チア部として、人の応援を、声を出し、踊り、手をたたき、ポンポンを振り、体の機能をフル活動して行って来ました。ある意味、私の青春は応援!!と言っても過言ではないです。数えきれないくらいの応援を通して、人の喜びや悔しさを、共有し合う同士として、感動を頂いて来ました。応援した時のエピソードは山積みあれど、私から人へ応援されたピカイチの、取って置きのエピソードは、亡き母から永遠、今なお続いて受けている応援エールを語らずにはいられません。

なぜなら、最後の息が止まる瞬間まで、我が子である私への応援エールは確かに続いている事を、彼女を看取りながら身に染みて体感できたからです。

振り返ると、小学生の頃は、テストで良い点を取り、母にほめられたくて見せに行くと「満点取れたね。今度はこの学校以外にもっと出来る人がいるから、その人達に向かって、上には上があることを意識して。次はそこへ向かって頑張る。」と、今思えば、次々に上のステージへ引き上げてくれました。そのお陰様でしょうか？気付けば常にその道の頂点はどう言うことかと見て、目指す癖が付いていました。最初は上手く行かずとも、粘り強く、諦めない所が、自分の長所と自他共に言えるようになりました。まだまだ女性の社会進出は限られた時代の社会人デビューでしたが、物怖じせず未来の希望を捨てずに、思いだけは発言し、チャレンジは続けて来ました。そのかいあって、新しいポジションを女性初で起用されたり、トライアルでもプロジェクトメンバーに加えて貰えました。

その反面、少々有頂天だった時には、「いつも始めた時の感謝を忘れるな」、「自分一人で作れたと思込んで、おごるな」「うぬぼれで、思わぬ裏切り、やっかみ、足は引っ張られるから気を付けろ」、「いつも謙虚であれ」と、叱咤激励し、釘をしっかりと刺してくれました。適齢期となった時、仕事が面白くなって来た私に「結婚を選ばない人生の選択肢も一つの選択肢で良いんじゃない」と、親族や回りに言われる事から、かえって守り励まし、応援してくれました。具体的には、家事を手伝おうとすると、「今は道を極めることに集中で良いんじゃない」と、決して甘やかさない、身の回りをサポートしてくれました。時々、希望が叶わず落ち込んだり、愚痴る私へは、黙ってコーヒー入れてくれたり、スイーツと一緒に食べながら、夜な夜な話を気が済むまで聞いてくれました。

そんな私もご縁あり、結婚、出産する決心をした時には、「女は弱く、妻は弱く、しかし母は強し」と言って、孫となる私の子どもを不安げに抱える私へ、ある日、電車の中で贈ってくれた言葉のエールです。

この言葉は母の産んだ私を可愛いから、その子の産んだ孫は可愛いものだ。母となったんだから、この子をしっかり育ててという意味だと言っていました。

子育てしながら、少しずつ社会へ本格復帰を選んだ際は、出来る限りの育児と生活のサポートに回ってくれました。急な孫の病気などでSOSにも、出来る限り駆けつけてくれました。段々、我が子も成長し、SOSも少なくなっていくと共に、会うことも少なくなり、時々会うと、後から両親の施術や入院、がん治療を知ったりと、水くさいと思うことが増えて行きましたが、子どもに心配をさせないことが、彼女の応援エールを続けたい思いからだとして理解しています。

こんなに応援エールを受けながら、老後に十分な介護や応援エールのお返しを出来なかった事は、大変な後悔です。

それでも、こんな私に、最後の入院中、痛みに苦しみながら、お見舞いに行く度に、「子どもを良くみてやりなさいよ」と、何度も何度も、口が利けなくなるまで、応援エールを言い続けてくれました。口が利けなくなるギリギリ前に、孫とひ孫に会わせられた事が、せめてものお返しとなれたのでしょうか？

その直後、口も利けず、食も取れませんでした。看取る最後まで、耳で私達の声聞いていてくれたと実感しています。

そして、2019年9月20日PM2時、スーッと息を止めました。

その後、もう会話も姿もないのですが、温かくいつも見守られ続けている事は、永遠に続く見守り応援エールそのものだと感じながら、安心と感謝が溢れて来ます。

どうか、皆様は、生前に「ありがとう」を言わずに後悔しないようにと、お伝えさせていただきます。

私は言えなかった後悔の代わりに、見守り応援上手の母の子として、そのスキルを引き継ぎ、娘や孫、更に世の中の皆様へ応援エールをする人として人生を満喫させて頂くことに精進して参ります。

「お母さん、産んでくれてありがとう。いつも応援ありがとう。」